

社会技術革新学会に期待する

製造業に身を置いて日々暮らしているが、企業活動を見てみると経営の視点だけでなく、営業、研究、生産の現場には様々な工夫がなされている。

2006年6月に社会技術革新学会が発足して以来、通称の現場基点学会にふさわしい学術発表会や学会誌の発行が行われている。

ややもすると「学会」という呼称からこうした実社会の現場とは程遠いアカデミアの世界が想像されがちであるが、当学会は幅広く社会のあらゆる現場で行われている変革に着目し、そこに流れる工夫、知恵、創造を炙り出そうとの試みに挑戦している。

したがって、日頃人前で発表することに慣れていない現場で実務をこなしている担当者や、論文に纏めるといふ作業とは縁遠いが永年の経験を積み重ねた作業の熟練者にも、社会革新の担い手としての新たな舞台を提供している。

社会への影響を会社の歴史、技術の歴史を振り返ってみる視点での捉え方がある。

人類が食料の保存に必要とした乾燥の原理をもとに、時代の要請にこたえる中で多くの産業を支える機械が開発され、改良され進歩してきた例が前号に紹介されている。ここには永年にわたって技術開発に取り組んだ研究者や技術者、職人のたゆまぬ努力と総合力の結晶が企業の中で実を結び、技術の革新が社会の変革にかかわってきた事例が示されている。その他にも当学会の発表には、会社の沿革や技術の変遷を振り返りながら、技術が確立されてゆく過程で、あるいは革新に取り組む過程で、現場が社会の変革に大きくかかわっている貴重な役割を数多く見ることができる。

この間の相互の関係を明らかにすることにより、これからも絶えず変革を続けていくであろう社会に対して、現場の気持ちや技術、行動が果たす大きな役割に光を当てることができるならば、当学会のひとつの大きな意図はかなえられることになる。

会社や技術に限らず人間社会が作り出しているさまざまな現場には、それぞれの工夫がある。一つ一つは小さな発想かもしれないが、コロンブスの卵は至る所にある。ちょっとした思いつきも、しっかりと考え具体化する行動と努力をすることによって成果に結びつく。さもなければ単に担当者の胸のうちに隠れ埋もれたままになってしまうかもしれない。勇気を持って成果を発表することにより、議論を呼び、社会へ刺激を与え、より広く深い変革につながる提案になることもある。

しっかりと考えた新たな試みへの取り組みが成果を出し、社会を動かす提案になることもあって欲しい。

当学会では自主的な研究活動も徐々に始まってきている。多くの方が学会に参画し、思いと力を発揮して頂ける場として発展してゆくことを期待している。

2009年8月31日

企画運営委員長 中島 幹